
 学 会 記 事

第 11 回新潟 GHP 研究会

日 時 平成 21 年 2 月 28 日 (土)
午後 2 時 15 分～
会 場 新潟大学医学部 有壬記念館

I. 一 般 演 題

1 大うつ病性障害との鑑別が困難であった筋萎縮性側索硬化症の 1 例

高須 庸平・遠藤 太郎・金子 尚史
染矢 俊幸

新潟大学医歯学総合病院精神科

【はじめに】筋萎縮性側索硬化症 (ALS) は進行性の神経難病で, 9% に大うつ病性障害が併存すると報告されている。我々は大うつ病を疑われ精神科を受診し, 大うつ病性障害 (MDD) の診断で入院したが, 治療中に ALS が明らかとなった症例を経験したので報告する。

症例は 78 歳, 男性。X-2 年から徐々に体重が減少し, X-1 年秋頃から食欲低下, 意欲の低下が出現した。X 年 1 月, 肘軟骨除去術を受けたが, リハビリへの意欲が湧かず, 運動機能の回復が不良であった。2 月頃から食欲の低下が悪化し, 興味の減退, 思考力の低下, 呼吸困難感, 胸部圧迫感, 易疲労感が出現し, 日中も臥床して過ごすようになった。1 年間で 18kg の体重減少を認め, 当院内科を紹介受診した。精査されたが体重減少の原因は不明で, 易疲労感や意欲の低下などもあり MDD が疑われて 5 月に当科を紹介受診した。その後, 歩行も困難となり, 食欲低下も改善しないため 6 月に MDD の診断で当科に入院した。入院時, 興味・喜びの消失, 意欲の低下, 易疲労感, 食欲低下, 胸部圧迫感を訴えたが希死念慮は否定し

た (ハミルトンうつ病評価尺度: 24 点)。入院第 6 日に呼吸困難感が出現し, 検査上両側の肺炎と診断され, ICU 入室して内科による治療が開始された。肺炎が改善後, 呼吸リハビリテーションで胸郭と上肢帯の筋萎縮を指摘され, 神経内科で精査したところ ALS と診断された。その後, 神経内科で保存的に治療が行われていたが, X 年 9 月に死亡した。

【考察】本症例は意欲低下, 食欲低下などの症状が前景となり, 呼吸困難, 胸部圧迫感などの呼吸筋萎縮による症状に先行して出現していたため, MDD と診断され精神科に入院となった。ALS は運動ニューロン障害であるが発症の様式は様々であり, また ALS 自体に MDD が併発することもあり, MDD と初期の ALS の鑑別には十分な注意が必要であると考えさせられた。

2 パロキセチンとロフラゼパ酸エチルの併用により新生児離脱症候群を呈した 1 例

井上絵美子・湯川 尊行・橋 輝
宮本 忍・鈴木 孝明*・風間 芳樹*
板垣 成孝**・庄司 圭介**
金子 尚史***
県立小出病院 精神神経科
同 産婦人科*
同 小児科**
新潟大学医歯学総合病院精神科***

【はじめに】妊娠後期から分娩次期までのベンゾジアゼピン系薬物の内服による新生児離脱症候群は多数報告されている。また, 近年 SSRI に関連した新生児離脱症候群の発生の危険性が指摘されている。今回我々は, パニック発作を繰り返す切迫早産の妊婦に対し, パロキセチンとロフラゼパ酸エチルを投与したところ, 新生児に離脱症候群と考えられる症状を呈した 1 例を経験したので報告する。

症例は 31 歳, 女性。X 年 4 月 (妊娠 27 週) 切迫早産で A 病院産科に入院。子宮収縮抑制薬を点滴されたところ動悸が出現した。この頃から出産への不安が増強し, パニック発作を繰り返すよう